

G

グランシップマガジン
[ジー] vol.29

GRANSHIP magazine
WINTER 2005

SPECIAL-1

2005年 しずおか 連詩の会

「泡雪の富士」の巻

次代を創る顔

声優 小林 沙苗

しずおかアーティスト・リレー

彫刻家 鈴木 久雄

SERIES わが羅針 第29回

羽田 健太郎

SPECIAL-2

チャイコフスキーの バレエ音楽。

村松友視の文化漫遊 ⑮

グランシップ ベンクラブ

鈴木 邦彦 (沼津高専名誉教授)

ART: YUKUO MURAKAMI

GRANSHIP
静岡県コンベンションアーバンセンター

二〇〇五年 しずおか

「泡雪の富士」の巻

連詩の会

それはホテルの最上階より望む、
雲峰への挨拶から始まった。

一九九九年に産声をあげた「しずおか連詩の会」は、その後五年にわたり毎年開催され、昨年は、そのすべてを収めた書籍『闇にひそむ光』も発行された。そうした積み重ねの二つの結果、期待の表れだろうか。一年の休みを経て再開された本会、今年の発表の席は満場だった。

前回までは、毎回海外の詩人を交えて開かれてきたが、今回はまさに「全日本」。連詩の第一人者といわれる大岡信氏を今年もさき手に、三回目の参加となる谷川氏は、大岡氏とともに連

詩の創始に携わった人である。一方、他の三名は、連詩初体験。歌人として知られる岡井隆氏に、海外各地の長期滞在経験をもつ井上輝夫氏、そして、今年度野間文芸新人賞受賞の平田俊子氏という魅力の顔ぶれが揃った。

さて、俳句の発句にあたる第一番を務めたのは、ベテラン谷川氏だ。創作会場であるホテルの最上階の眺めから、当地と仲間への挨拶を兼ねた二編が創作され、その冒頭より今回の題は『泡雪の富士の巻』に決定した。「この風景に負けない詩がつけられるだろうか」という不安があったと、後に谷川氏は明かしたが、同じ座に集い、互いの間合い、心の内を図るうちに、そのやりとりはときに深く、ときに軽やかに交わされるようにもなり、やがて眺望以上の四十編が完成した。

グランシップで開かれた発表会では、ときに冗談を交えながら、終始、楽しく和やかなムード。詩人による朗読発表の後は、詩の繋がりを解く解説も行われ、会場を訪れた人々は、連詩ならではの言葉世界を楽しんだ。

創作 二〇〇五年十月二十四日(木)～二十五日(金) ホテルセンチュリー静岡
発表 二〇〇五年十月二十七日(日) グランシップ 十二階会議ホール風



創作 ホテルセンチュリー静岡

連

詩とは、連句や連歌の美学をベースにした創作現代詩で、毎年さばき手を担う大岡氏は、その提唱者であり、第一人者。定まった形式はないが、本会では、五行と三行の詩を交互に繰り返すフォームをとっている。各詩にはさまざまな視点、モチーフが織り込まれ、別の詩人が後の詩を創作し繋いでいく。発表会では、創作者による朗読のほか、繋がりを解くための解説が行われ、以下は、作品全編と、その解説の一部である。

眺望のもと、五艘の舟が出帆。
波にゆれて行き着く先は、さて？

【第一編く第五編の解説】

俊太郎…快晴の富士山の眺めから、まずは土地への挨拶、一緒に創作する者への挨拶を込め、明るい発句を。「五艘」は五人の詩人、「大漁旗」は素晴らしい作品のことで、「強い引き」は上手い言葉が見つかったという弾みですね。俊子…初めての連詩で頭が真っ白になつてしまい、隣の黙考部屋に逃げ出したんですが、そこはそれまでの「大きな窓」の景色とは違って、「小さな景色」があり、その変化に心が動いたので、軽やかに次へ渡しました。

隆…同じホテルで食事と一緒に、こんな詩になりました。年長者ですから「老人」の特権を交えて。(笑)今思うともっと軽く次へ繋ぐべきだったと思います。初心の作ですね。

輝夫…「波にゆれ女に揺れて」とは、岡井さんはいした老人だと。(笑)でも、名指すわけにもいかないので、「倚松庵随筆」と谷崎潤一郎を出しました。この後、どこかへ行ったほうがいいと思い「航空券」でどうぞ旅に出てくださいと。

信…井上君は、国際人ですが、僕としてはそう遠くへは行かせたくなくて、大連に。目の前の辞書で調べたら、造船業が盛んとあった。そういう工業製品と非工業的な風景を出してみたいです。私は行ったことがないけれど。(笑)

一

泡雪の富士を背に

言葉の大洋に漕ぎ出す五艘の空舟
心のうちに大漁旗をはためかせ

男波女波に揺られ揺られて
お 竿にもう強い引きがある

二

小さな窓には小さな景色
大きな窓には大きな景色
どちらの窓も光に満ちて

三

変化の者 容れて流す舟の窓の内には
カマンベール・チーズや新鮮な林檎が横たはり
いますんだ朝食の はかなきなごり
波にゆれ女に揺れて西へ行く、ああ
老人のゆらぐ白歯の

四

倚松庵随筆のページ進まず目もうつろ
文机の片隅でウイंकする航空券
耳に聞こえるロバの蹄 かつかつ

五

あれが渤海湾にのぞむ大連の港
造船業では周辺トツプ
車両もわくわくさせる輝き
でも夕陽を浴びて並木道を歩む
金に燃える羊の群れのふさふさの髪

六

皇帝の噴墓の壁のカピだらけの天女たち
まあ うちの孫娘そっくりのが一人いる
と老妻が言う

七

女だつて腹が減る
死ぬとますます腹が減る
生きてるあいだは人の世話ばかりで
一度もゆつくり食事できなかった
わたし もう作りませんからね

俊太郎

俊子

隆

輝夫

信

俊太郎

俊子

「友人にFAXで資料を送ってもらったり。怠けているようで、みんな一生懸命でしたよ」



大岡 信

おおおか こと

1931年、静岡県三島市生まれ。東京大学文学部卒業。詩集『記憶と現在』、『春 少女に』、『捧げるうた50篇』。最新詩集は『旅みやげ にしひがし』。著作『折々のうた』(通巻17冊)、『連詩の愉しみ』、『ヨーロッパで連詩を巻く』、『うたげと孤心』、『日本語の豊かな使い手になるために』など。現在、日本芸術院会員。2002年、国際交流基金賞受賞。2003年、文化勲章受章。

「想像以上に参加してみると面白くて、詩に浸っていられた、幸せな三日間でしたね」



平田 俊子

ひらた としこ

1955年、島根県生まれ。1983年「鼻茸について」等で第一回現代詩新人賞を受賞。詩集に『ラッキョウの恩返し』、『(お)もろい夫婦』、『ターミナル』(晩翠賞)、『手紙、のち雨』、『詩七日』(萩原朔太郎賞)、『現代詩文庫・平田俊子詩集』などがある(いずれも思潮社)。小説や戯曲も手掛けており、小説集に『ピアノ・サンド』(講談社)、戯曲集に『開運ラジオ』(毎日新聞社)がある。他にエッセイ集『きのうの雫』(平凡社)など。近刊は小説集『二人乗り』(講談社)。

「詩よりも夕焼けのほうが美しい最上階。連詩は、句会などとはまったく違うものでした」



岡井 隆

おかい たかし

1928年、名古屋市生まれ。慶應義塾大学医学部卒業。「アララギ」を経て『未来』創刊に参加、現在同誌編集・発行人。歌集に『禁忌と好色』(釈道空賞)、『親和力』(斎藤茂吉短歌文学賞)、『ウランと白鳥』(詩歌文学館賞)、『ヴォツェック／海と陸』(毎日芸術賞)、『馴鹿時代今か来向かふ』(読売文学賞)がある。現在『岡井隆全歌集』(全4巻)刊行中。評論・エッセイに『岡井隆コレクション』(全8巻)、『赤光』の生誕など。

八 食堂車は今しも黄泉平坂にさしかかった
静かに絡み合ふフオークとパスター
黄泉戸喫のはじまり はじまり

九 「よってらっしゃい よってらっしゃい
本物の火の鳥だよ 木戸銭 安いもんだよ」
童たちは蘆簀に首差し入れて「わーいわい」
はたはたと炎の翼は産声をあげ
童たちは下駄けりあげて「あした天気になあれ」

十 けりあげた下駄は三日月まで行く
桃太郎と金太郎 どつちが好男子?
好きな近所のおばさんを質問攻めで困らせる

十一 月のとなりに「火星が出てゐる」
火星を見るたびに智恵子を思い出す
月のとなりに
満身創痍の
高村光太郎が今夜も出ている

十二 十和田湖畔に春がきて
浮き雲のひとつふたつ 飛びたつ水鳥
寂しい人もお花見にまたくる頃だよ

十三 幸福つて 意外に 寂しい つて
言ふじやありませんか
姫は殿を得て
紅葉のなかの坂を ゆつくりと
上つて行かれましたが

十四 親御さんがなくなられて
お嬢さまの肩が このごろ急に
いかつくなつておいでだと女中たちのうわさ

十五 昭和初期に出た文学全集一揃い
ネットオーケションで安く落として
アルミとガラスのシェルフに飾り
携帯で撮ってHPにアップする
それだけで何故か心がやすまるんだと

十六 朝届いた手紙は朝のうちに読まなくてはね
昼になると萎れるからね
夜になると散るからね

隆

輝夫

信

俊子

輝夫

隆

信

俊太郎

俊子



古の恋から、現代の恋へ。
満を持して「駿河」「桜蝦」も。
【第十八編と第二千編の解説】

俊子…十三、十四と続いた恋の世界にわくわくしていたら、十五で谷川さんが見事にブチッと。(笑)前には戻れないのが連詩のルール。それでも恋に心が残っているの「メール」の話にパソコン世界になっても、手紙が来るとうれし、来ないと悲しい。心の動きは同じだと。

輝夫…せっかく静岡に来たので「桜蝦」を使おうと思っていたところ、十五から現代風景になったので、そら、来たと。(笑)現代風の恋にしました。

隆…「少女の肩のかたさ」って、十四が匂っているけれど、そのときは気づかなかったな。「駿府」「駿河」という言葉は、音もいけれど、さすがにそのままでは…「ならぬ堪忍するが…」に信…前の「卵」をぶつけられた子を登場させています。幼稚園か、小学校低学年でしょうか。十八を受けながら、別の方向に伸ばしました。

俊太郎…いろんな人と連詩を巻いていますが、今回のように恋がらみが多いのは初めて。たぶん岡井さんのせいだけ。(笑)平田さんに怒られるけれど、また叩き切って。でも、メカニカルなだけでなく、女の子の気配を出した苦心の作です。(笑)

十七 桜蝦をたべようと

とうとうたらの駿河の海ぞい
ドライブがてらの初めてのデート
引きよせる少女の肩の
かたさ知る茶髪少年の驚き

十八

銭湯の煙突の上に昼の月が出てゐた
この次に逢つたら
ならぬ堪忍するがの卵をぶつけてやりたい

十九

仲良しの女の子が
おでこにこぶを作っている
給食の先生の恋人の悪口をいつたら
ゆで玉子をぶつつけられたという
直球で ミケンは少しはずしていた

二十

ぼつんと一基だけ立っている風力発電の
動くともなく動いている三枚の羽根
そよ風のハミングが聞こえるかい？

二十一

冬の日のバルコンでセキレイが二羽
パン屑をついばんでゐる
風の中の羽根のやうにゆれ動くところを
とがめられたのは、あれは
いつの日の水辺だつたつけ、なあ

二十二

岩魚のおよぐ深山幽谷
地蔵さまが笑っている峠道
日暮れに泣いた 赤子も子守りも

二十三

日本の風景を投げ捨てて
明治の画家たちはめざした
セザンヌの山を ゴッホの麦畑を
どこの国でも日暮れは寂しく
カラスは黒い声で鳴く

二十四

木靴をはいて妻は一人旅から帰ってきた
なんだか吹っ切れたような顔つきで
子どもたちにも小さな木靴を土産に

二十五

贈りものをするには
ちよつと貧弱なものがいい
相手がぐすりと笑つてくれれば上出来
死海の塩のひとかけらなんか
ほら話の種子をふんだんに浮かべている

輝夫

隆

信

俊太郎

隆

輝夫

俊子

俊太郎

信

「暗闇から光のあるところに引きずり出されて、最初は、目が見えない感じがしました」



井上 輝夫

いのうえ てるお

1940年、兵庫県西宮市に生まれ、5歳から10歳まで広島県尾道に疎開。慶應義塾大学卒業、故岡田隆彦、吉増剛造などと「ドラムカン」創刊。69～73年 フランス滞在、ニース大学博士号取得、処女詩集『旅の薔薇窓』、シリア、レバノン紀行『聖シメオンの木宛』、『ボードレールにおける陶酔の詩学』、詩集『夢と抒情と』、『秋に捧げる十五の盃』、82～84年 フランス滞在、89年 中国旅行、92年イギリス滞在、95年 奥武蔵、雷電山に移住。99～01年 アメリカ、ニューヨーク滞在、04年 翻訳、イグナシオ・ラモネ『21世紀の戦争』、05年詩集『冬 ふみわけて』。現在、中部大学で教鞭をとる。



谷川 俊太郎

たにかわ しゅんたろう

1931年、東京生まれ。都立豊多摩高校卒業。1952年、第一詩集『二十億光年の孤独』出版。以後詩、エッセイ、脚本、翻訳などの分野で文筆を業として今日にいたる。詩集に『21』、『落首九十九』、『ことばあそびうた』、『定義』、『みみをすすす』、『日々の地図』、『はだか』、『世間知ラズ』、『minimal』など、エッセイ集に『散文』、『ひとり暮らし』、絵本に『わたし』、『ともだち』、『もこ もこもこ』などがある。谷川賢作との共演も多く、CD『クレーの天使』、『家族の肖像』などが出ている。最新刊は詩集『シャガールと木の葉』、CDブック『あのひとが来て』。

「僕は、連詩のすれっからしだけど、今回ほど恋がらみが多いのは初めてですね」

二十六

塩をもらはない生活も長くなった
昼寝から覚めて曙かと錯覚する薄くらがりを
幸ひ 宵の明星がきらめいて教へて呉れた

二十七

下駄をつっかけ たどる桜上水
雀たちのおしゃべりもにぎやかで
武蔵野の秋はかんばしい
地球はしっかり夜空を支える
不運を鳴くなよ 捨て猫さん

二十八

私の棲む空き地にも湖があり枯葉のような魚が泳いでいます
遊びにいらして下さい
二十億光年ほど遠くありませんので

二十九

半世紀ぶりのプラネタリウム
見終って外へ出たらまだ真昼間の街
小さな公園のベンチに腰かけて
未練がましくまた求人欄をひろげる
ここだって宇宙の一隅なんだが

三十

私の介護しているおじいさんが
飼っていたラブラドルの大犬
求飼主の立札に応募してきた 若い娘が

三十一

「シンパisinナイデクダサイ
ジブンサガシノタビラツツケティマス
ジョンモゲンキデス マリコ」
でもくたびれてきたバックパック
安食堂のメニューをまえにお金かぞえる

三十二

灯台の下の芝生に寝転んで読み始めた短篇
なんと灯台が主題だった
なんだか作者に会ってみたくなった

三十三

ひとつの物語が終わり また新しい物語が始まる
ひとつの旅が終わり また新しい旅が始まる
過ぎてきた町 別れた人の名
おはよう

みんな大好きだよ

三十四

ほらあそこに見える尖った塔
あの下にはお喋りのオウムがいて
ともだちみたいに きみに話しかけるぜ

隆

輝夫

俊子

俊太郎

信

輝夫

俊太郎

俊子

信



発表 グランシップ会議ホール・風



天地間の「五行」と「五行」の詩 やがて映し出された、自分の姿

【第三十六編と第四十編の解説】

輝夫…三十五は、妖艶な世界ですね

終局に向かっているところでもあるので道行きに。だけど、「芝居なのさ」として、軽く次へボールを渡したかったです。

俊太郎…この辺で視野を広げ、俯瞰的に。火や水などの「五行」という古代的な世界観と、我々が書いている三行

と「五行」の詩。そして、五人の詩人言霊といわれるように「気は詩の根本にあると。やや自画自賛ですが。

俊子…前の「五行」を曜日に置き換えたら、日と月がなく、ここで「月」を上ったばかりの月は、赤いんですね。ホテルの傍を通る貨物列車をわくわくしながら、夜中の二時頃まで見えました。

信…もうすぐこの連詩も終わるのに、この展開をどうしよう。(笑)全体を童話的に持っていけば、何とかなるだろうと「ムササビ」に。そして、さすが岡井さん、この四十番のためにこの人を呼んだのだと得心いたしました。(笑)隆…この五人は、詩的にも文学的にも経歴が違って、結局、故郷や子どもの頃に習った言葉をそれぞれ使って作っていたことが面白いなと思いました。最後の句は、芭蕉の句の「伊吹」を「鏡」にかえた本歌取りで、この会でわかったことがあるとしたら、それは自分の姿ではないかというわけです。

三十五

雨の中ミサの鐘が鳴り始めた
「好きだ」といつても鸚鵡返しに「好きだよ」
とはかへつて来ない
そこがかへつて刺激的
女とオレ 鐘の音に濡れてただよふ

三十六

おまえの手をひつつかんで
雪の舞う花道を逃げて行くなんてさ
そんなことはやっぱり芝居なのさ

三十七

火と木と土と水そして金
天地の間をめぐる続ける五つの元気が
どの五行にもひそんでいるはず
揺らめく言葉のオーラに
頬赤らめているやからもいる

三十八

ギクシヤク ギクシヤク
貨物列車のにぎやかな歌声
月齢二十五・一の赤い月まで届け

三十九

待ちに待った船便が着いた
父ちゃんが送ってくれたスキー靴だ
ピカピカの留め金もついている
大滑降を練習して
ムササビたちにいつせいに拍手させよう

四十

気がついたらふるさとの村言葉を使つてゐた
また あのムササビの啼く山へ帰つたら
折々に鏡を見てや 冬籠

創作 二〇〇五年十一月二十四日(木)起
同月二十六日(土)満尾

於 ホテルセンチュリー静岡
参加者 詩人 岡井 隆
平田 俊子
井上 輝夫
谷川俊太郎
大岡 信

発表 二〇〇五年十一月二十七日(日)
於 グランシップ十一階会議ホール・風

隆

輝夫

俊太郎

俊子

信

隆

チャイコフスキーの バレエ音楽。

Tchaikovsky's Ballets

呼鈴に招かれた、幸福の音楽たち。

肖像画の彼は、その甘美な旋律とは裏腹に、視線は重く思い詰める風で、何か問いたげだ。彼をよく知る人々によれば、彼ほど内気で謙虚、そして、己に厳しい作曲家はいないという。彼は言う。「悲しいこと、辛いことを我慢するのが、幸福をよぶ呼鈴になる」と。複雑な思いを秘めていたといわれるチャイコフスキーのこと、何が彼にとっての「幸福」であったかは定かではないが、少なくとも我々は、彼が呼び入れた幸福の一つであったはずの「作品」を堪能することで、彼の悲しみや辛さにいくらかでも報いられればと思う。となれば、いざ、チャイコフスキーの世界、彼のバレエ音楽の世界へ。遥かロシアから響く、幸福の呼鈴をその胸に聴こう。

チャイコフスキーは、1840年、ロシアのウラル地方で生まれた。幼少の頃から、感受性が強く、とくに「音楽」に対する反応には、特別なものがあつたという。あるときなどは、母親が戸外に出て遊ぶよう、ピアノの椅子から彼を引きずりおろすと、窓へと走り、ガラスを叩きながら、歌を歌い、リズムをとり、ついには窓ガラスを割ってしまったのだ。またあるときは、家庭教師に向かつて「この頭の中にある音楽を追い払ってくれ」といい、泣きながら頭を叩き続けたという。

悩める音楽家、 チャイコフスキー。

法律学校を卒業し、一度は司法省の役人となるが、夢を捨てきれずに再び音楽の道へ。しかし、ピアノが非常に上手かったにも関わらず、生来の内気さゆえ、ピアニストとしての舞台活動を拒否。音楽学校で変奏曲の課題が出されれば、200曲も作曲して持ち込み、先生をうんざりさせ、また、37歳で教え

子と結婚するが、新婚旅行中に二人の生活に耐えきれずに神経衰弱から自殺を考えるなど、物静かな面差しからは想像もつかないほど、その選択は常に「極端」だった。

そして、そんな性格の「端を表す確かな「しるし」は、楽譜の上に刻まれている。当時、最弱音、最強音は「ppp」「fff」までがほとんどだった。しかし、彼はときとして「pppppp」や「fffff」という記号を用いた。演奏家によると、実際に演奏する場合、これを相対的な強弱としてとらえるのが妥当なようだと

が、こうした極端なダイナミズムも、確かに「チャイコフスキーらしさ」の一つだ。さらにチャイコフスキーについて語るとき、つけ加えられる言葉がある。それは彼が「同性愛者」（あるいは「バイセクシャル」）であつたということだ。当時のロシアにおいて、これは重大な問題であり、彼の死因についてもコレラによるものとする説とは別に、同性愛への苦悩の末の「自殺説」もあり、この方面から彼の作品を解釈する向きもあるなど、いずれにしろ、彼の人生は、絶えず混沌の中にあつたといえる。

優美で叙情的、甘くメランコリックな旋律。そして、絢爛豪華なオーケストレーション。性格ほど気難しくはないその作品は、世界中で親しまれ、音楽の教科書やクラシックの入門的なコンサートでは、必ずといっていいほど、彼の作品が用いられている。

ところで、チャイコフスキーという名からまず、最初にあなたが思い浮かべる曲は何だろうか。ピアニストの試金石といわれる「ピアノ協奏曲第一番」だろうか。「交響曲第六番 悲愴」も、誰もが一度は耳にしたことのあるはずの

楽曲だ。しかし、それらと並んで、あるいはそれ以上に親しまれているのが、彼のバレエ音楽である。

「白鳥の湖」「眠れる森の美女」「く

甘くて優美、リリカルな、 彼のバレエ音楽。

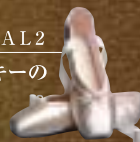
るみ割り人形」といえば、チャイコフスキーの三大バレエ。それらは美しい旋律と華麗なオーケストレーションから、音楽的にも最高峰のバレエといわれるが、

そもそも第一作「白鳥の湖」の作曲依頼を受ける際、彼はまず、バレエ音楽の復権を考えたのだという。というのも、それまでバレエは踊り手のもの、音楽は単なる引き立て役に過ぎなかつたのである。それを彼は、音楽は少なくとも舞踊と対等に結び合い、一体となって劇的効果を高めるものであることを訴えたかったのだ。

しかし、当時としては、彼の試みはやや新しすぎたらしい。結果、踊れない、演奏できないということから、陳腐な曲に置き換えられてしまい、これに激

ピョートル・イリイチ・チャイコフスキー
Pyotr Ilyich Tchaikovsky 1840-1893

19世紀のロシアを代表する作曲家。1840年5月7日、ロシアのカムスコ＝ヴォトキンスクで生まれる。法律学校に学ぶ傍ら、ピアノや音楽理論のレッスンを始め、法務省に勤めても音楽を捨てきれず、ロシア音楽院に入学。アントン・ルビンシテインに師事し、卒業後はモスクワ音楽院で教職に就くと同時に精力的な作曲活動を展開。「交響曲第1番」幻想序曲「ロミオとジュリエット」「弦楽四重奏曲第1番」(アンダンテ・カンタービレ)、「ピアノ協奏曲第1番」などを生む。西欧的で甘美なメロディーの名曲が多く、代表作に「交響曲第4番」「バイオリン協奏曲」「イタリヤ奇想曲」、バレエ「眠れる森の美女」、バレエ「くるみ割り人形」、ピアノ曲集「子どものためのアルバム」など。「交響曲第6番」の初演後まもなく53歳で急死し、その死に謎を残した。



日本で年末の定番といえば、ベートーヴェンの「第九」だが、ヨーロッパでは、俄然チャイコフスキーの「くるみ割り人形」である。

物語は、ドイツの作家E.T.ホフマンの

「くるみ割り人形

と二十日ねずみ」を

原作とし、フランス

の文豪アレクサンド

ル・デュマが脚色した

3幕3場を下敷きに、マリウス・プティパが

2幕3場に構成。当初、チャイコフスキー

は、プティパによってリズムやテンポ、小節

数、転調などについて子細な指示のある

作曲にうんざりしていたというが、それ

死の前年に完成した

「くるみ割り人形」。

でも作曲は順調に進み、1892年、ペテルブルグのマリンスキー劇場にてバレエ初演を迎える。

そして、結果からいえば、音楽的には

上々、振付けは退屈という評価だった。た

だ、これにはプティパ

が病気でダウンし、

弟子のイワノフが代

役を務めたという

経緯もあった。今日

的な評価が得られるようになったのは、

1934年のワイノネンによる振付け以

降のこと。彼の新演出によって、本作は、

その真価を世に知らしめることとなった

のである。

「くるみ割り人形」は、彼の3大バレエの

中でも、とくに音楽が優れているといわれ

るが、バレエの見所としても実に多彩で、

デイルティスマン（一人または数人で踊る小

品）やグラン・パ・ド・ドウ（壮大な男女2人

の踊りで高度テクニ

クの見せ場）など、物

語から飛び出してい

たようなダイナミッ

クで、多種多様な踊

りが存分に楽しめる構成になっている。

チャイコフスキーの幻想的で華やかな

音楽と、心躍るバレエ。そんなファンタジー

の世界を、今回は、創設以来クラシックバ

レエの本格的な舞台に取り組み「前田バ

レエ団」が登場。さらに、グランシップで

地元静岡の強力な顔ぶれ。 魅力の共演。

はおなじみ、バレエ音楽の日本における

第一人者 堤俊作指揮による「静岡交響

楽団」が盛り上げる。さらに雪の場面では、

芸術性の高い公演で好評を博す「静岡

岡児童合唱団」が出演。加えて、怪しい

人形使いドロツセルマ

イヤーに堀登、美し

い王子にエンバ・ウイ

リス、星の王子に正

木亮羽という実力

派の特別出演も決定している。

本公演は、一般的に知られている「ワイ

ノネン版」で、ファンタジー感もたっぷり。

大人も子どもも想像の羽を思いきり広

げれば、そこにはクララが見た夢と同じ、

一夜の夢世界が待っているはずだ。

Tchaikovsky Story The Nutcracker

【第一幕】 クリスマス・イブの夜。クララの家にパーティーの客が次々と到着する。大人や子どもが居間で楽しそうに踊る中、人形使いのドロツセルマイヤーが登場し、手品や人形たちを踊らせて見せる。やがて彼は子どもたちにクリスマスプレゼントを渡し、クララにはくるみ割り人形を贈る。それを欲しがった弟フリッツと取り合ううちに人形は壊れてしまう。夜中、人形が気になったクララは、静かな居間へ。すると、突然クリスマスツリーが大きくなり、ねずみの大群がおもちゃの兵隊と戦争を始める。くるみ割り人形も指揮をとり、ねずみの王様との戦いが繰り広げられる。クララ

はスリッパを投げて、ねずみの気をそらし、くるみ割り人形に勝利をもたらす。すると、くるみ割り人形は王子の姿になり、雪の森を抜け、クララをお菓子の国に連れて行く。

【第二幕】 お菓子の国の女王・金平糖をはじめ、たくさんの住民に迎えられたクララ。いろいろなお菓子の踊りを見せてもらうが、やがてみんなに感謝し、別れを告げる。ふと気づくと、そこはお菓子の国ではなく、居間のソファの上。すべてはイヴの夜に見た、クララの夢だったのだ。

原作では、人形の国から帰った主人公を王子が迎えにやってくる、再び人形の国に旅立つが、プティパは、この最後の場面をカット。が、それではなんとも収まりが悪いということから、その後、ワイノネンの振付けによって改訂され、現在では、夢から覚めた場面で終わらせることで、クリスマス・イヴの一夜の物語として定着している。



官民一体のモノづくり、文化づくりを。

大竹 省一 (写真家)

「静岡の魅力 フォトコンテスト」審査委員長

「フォトコンテスト」は、回を重ねるごとに内容がバラエティに富み、応募者も増えてきましたね。とくに中高年の応募が多く、女性も増えていることは喜ばしいことです。写真文化を通じて社会文化を向上させるという意味では、若い人がもっと目覚めてくれればと思います。最近、写真の世界でもデジタル化が進んでいます。けれども、やりやすい、動かしやすい

ことをモットーに機械を単純化していくと、面白さまで省略されてしまうようなところもあるんですね。いろんな操作、プロセスがあり、壁を乗り越えるところにユーザーの楽しみがある。そして、そこが非常に大事な部分だと思いませんか。静岡生まれの一人として言わせてもらおうと、静岡県には文化的な措置はたくさんあるんですね。ただ、そういう「点」は多いけど、

線を忘れている。ある面で近視眼的で、結果的にそれがマイナスになることもある。やはり点と線の方程式の上でモノづくりをしなければね。一つ一つの措置は素晴らしいし、土地もいい。食べ物もおいしい。しかも日本列島の中央にある県ですから、これからの文化のあり方を官民合わせて研究していけば、もっともいい県になるんじゃないでしょうか。



前田 香絵



前田 藤絵



堤 俊作

バレエ 前田バレエ団

'50年設立の前田バレエ学苑の研究科、専門部を基に'78年設立。地元演奏団体、文化団体と交流を持ちながら、クラシックバレエの本格的な舞台づくりを目指して活動。コンテンポラリー作品にも挑戦しつつ、海外でも公演している。三重、栃木の国民文化祭にも参加。'05年8月静岡市政令指定都市移行記念「バレエのタベ」開催。'98年静岡市芸術文化奨励賞受賞。

音楽監督・指揮 堤 俊作

'72年東京交響楽団でデビュー。東響、札幌の指揮者を歴任。'78年ジュネーヴ国際音楽コンクール指揮者部門優勝ほか、ロンドン交響楽団等に客演。現在は静響、ロイヤルチェンバーオーケストラ、ロイヤルメトロポリタン管弦楽団、梓室内管弦楽団、牧阿佐美バレエ団、井上バレエ団の音楽監督。日本のバレエ音楽指揮者の第一人者として欧米でも広く知られている。

演奏 静岡交響楽団

'88年「静岡室内管弦楽団カペレ・シズオカ」として設立。'94年「静岡交響楽団」と改称。県内で最古のプロオーケストラとして活躍。'94年音楽監督・指揮者に堤俊作を迎え、定期演奏会をはじめ、小中学生のための音楽鑑賞会や企業イベント等に出演。'02年度から静岡県文化財団主催のグランシップ・静響シリーズがスタート。本格的な活動が始まる。

合唱 静岡児童合唱団

'43年故戸崎舜裕により設立。NHKラジオ番組で活躍。'56年戸崎裕子が後継し、「NHK児童合唱団」の名で全国的に活躍。'70年NHKより独立し、「静岡児童合唱団」と改称。その後、世界各国の合唱団と共演、7回の演奏旅行を実施。幼児から高校生までの3クラス構成で、国内外の音楽家とも共演し、芸術性の高い演奏で好評を博す。'75年静岡県文化奨励賞受賞。

Tchaikovsky
The Nutcracker

チャイコフスキー

バレエ「くるみ割り人形」全幕

2006.1/22(日) 1日2回公演

【昼の部】12:00開場／12:30開演

【夜の部】16:30開場／17:00開演

グランシップ 中ホール・大地

全席指定 S席6,000円(当日6,500円)

A席5,000円(当日5,500円) 学生席(大学生以下) 1,500円

チケット残りわずか(昼の部S席完売)

特別協賛／米久(株)

構成・演出／前田 香絵、前田 藤絵

振 付／前田香絵、前田藤絵(ワシリイ・ワイノナーン版に基づく)

音楽監督・指揮／堤 俊作

舞台監督／相馬 勝己

照 明／梶ライティングデザイン

舞台装置／ユニワークショップ

バレエミストレス／前田 晶子、浅敷 久美子、森川 里子

演 奏／静岡交響楽団

合 唱／静岡児童合唱団

特別出演

堀 登<ドロッセルマイヤー>

エンバ・ウリス<王子>

正木 亮羽<雪の王子>

田中 英幸、井上 浩二、川島 春生、桑原智昭、増田 真也

出 演

山本 里香<金平糖の精>、川島 麻実子<金平糖の精>

原 あゆ美、長谷川 恵美、前田バレエ団、前田バレエ学苑ジュニア部



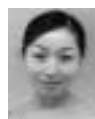
堀 登



エンバ・ウリス



正木 亮羽



山本 里香



川島 麻実子

羽田 健太郎

カンヴァスの上の音楽。

「ピアノを弾くことと、オーケストラを振ることは、使う絵の具が、ピアノか、オーケストラかの違いだけで、一つのカンヴァスに自分の音楽を描くという点では、結局、同じだと思うんだよね。」
カンヴァスの大きさは、違うかもしれないけれど」

コンサートは、構成が大事。

氏は、「クラシックはシャイな奴だ」と言い、そのシャイな友人の手を引く張つて、我々がいる場所まで連れてきてくれる。そしてあるときはピアノによつて、またあるときはトークから、その人柄を聴くうちに、氏の友人は、いつの間にか我々の友人になっているのだ。そこにいる人を誰一人置いてきぼりにしないのは、伝わる言葉で伝えるから。氏が音楽と人間、2つを同時に語ることができる、バイリンガルの音楽家だからなのだ。

——子どものためのコンサートなど、音楽に親しむための活動を広く展開していらっしゃる羽田さんですが、とくにクラシック音楽を

楽しむには、どのようなアプローチがベストだ
とお考えですか。

「やはり生の音楽を聴くことじゃないかな。
それはクラシックでもロックでも同じだけど、
とりわけクラシックは毛嫌いしないで生の演
奏を聴いてもらいたいですね。たとえばえ
ば長くて難しいといわれるブルックナーだっ
て、実は簡単なんだから。1楽章に3つの主
題が出てくるけれど、それしかないんだか
らね。まずは先入観を捨てて、生を聴いて
ほしい。よく広告されている名曲CD 10枚
セットは、A社も、B社も似たり寄ったりで、
「田園」「運命」「未完成」...でしょう。まるで
デパートの大食堂みたい。ライメン、ハンバード
にお子様ランチ。ほかにもおいしいものがいっ
ぱいあるよと言いたい」

——クラシックの中にポップスが顔を出した
り、ジャズが登場したり。羽田さんのコンサ
ートは、プログラムがまずユニークですね。

「コンサートは構成が大事だと思っている
んです。最初は聴く人も演奏する側もやや
緊張しているから、映画音楽から始めても
膝を割って話そうよ、という気分にはなれ
ない。そこは、ですます言葉“で会話ができ
るクラシックから始めて、そのうち”今、お
らんとこで柿がなつてな、これがえろう旨い
んや...”ぐらいまで和んできたかな、という
のが休憩前あたり。休憩後は、その柿をそ
のままでもええけん、縁側に吊つとくだ
これがまたなあ...”というプラスアルファを
つけていく。構成を間違えると、肩に力
が入ったまま一部が終わっちゃったりするん
だよな」

——羽田さんをはじめ、アシケナー、ジャ
ンドレ・プレビンなど、ピアノストで指揮もさ
れる、いわゆる弾き振りが多くいよう
ですが、それは音楽をつくる上で、ピアノが
そういう位置にある楽器だということなの
でしょうか。

「ピアノを弾くということとオーケストラ
を振るということは、一つのカンヴァスに自
分の音楽を描くという点では、結局、同じ
だと思ふんだよね。ピアノという絵の具を
使って描くか、オーケストラという絵の具で
描くかの違いだけで。もちろんカンヴァスの
大きさは違うかもしれないけれど。ヴァイ
オリン出身の指揮者にロリン・マゼールやボ
スコフスキーなどがあるけれど、彼らにして
もヴァイオリンか、オーケストラかの差だけ
なんだと思う。ただ、ヴァイオリン一本で
は、メロディーは弾けるけれども、ハーモニ
ーはできないでしょう。ところがピアノは、メロ
ディー、リズム、ハーモニーという音楽の3要
素がすべてあるという意味で、多面的であ
るということはいえるかもしれないね」

——では、自分の音楽をつくる上で、弾き
振りは理想のスタイルということですか。

「もちろん自分の音楽を理解して、こう振
てくれる人がいたらいいなと思うことはあ
りますよ。だって、倍の労力だもの。一つの
オーケストラでピアノが弾き振るのなら、
聴衆の前で一つの曲を10回ぐらい合わせてみ
るといいんだよね。同じコンサートマスターで、
過半数の楽員が同じ人なら、見事なアンサ
ブルができると思う。初対面や2回目、3
回目では、まだ音楽的に探りがあるでしょ

う。それが7回目、8回目あたりから、本音
で話せるようになって、やがて遊びもでき
るようになるわけ。おつ、お前、今日はそうき
たか。じゃあ、俺はこう行くぞ、とかね」

——クラシックから、ポップス、ジャズまで、
多彩な音楽活動を展開する中で、ご自身と



好評の「四季」シリーズより、人気の楽曲と未発表4曲による選りすぐりのベスト・セレクション。
クラシックからジャズ、スタンダード、映画音楽、オリジナルまで、ハネケン・ワールドが楽しめる1枚。

してはクラシックはホームベースという感覚
なのでしょう。

「音楽に限っていうと、クラシックを勉強し
てからジャズやポップスをやるようになって
も、弊害はないわけですね。それが逆はあ
る。ジャズから入ったピアノストが、たとえ

ショパンが弾きたいといっても、限界がある。
ジャズは、ハノンやチェルニーを勉強して弾く
のではなくて、オスカー・ピーターソンが好き
だとか、そういう部分から興味を持って、高
校ぐらいからピアノを弾き始めたりするわけ
だけど、クラシックの場合、指の鍛錬は、だ
いたい高校時代にまでにはほぼ終わっていきな
けないんだよね。ピアノを弾く、という基本
がクラシックにはあるんです。だから、ホーム
ベースという言い方で、間違いないと思
うけれども、ホームベースの先に、1塁も、2
塁も、3塁もある。その総称が音楽というもの
なんじゃないかな」

——たとえばクラシックとジャズとでは、そ
れぞれのベースに向かう気持ちはどうなの
でしょう。

「それは違います。クラシックには、作曲家
が書いた譜面を着実に再現するという大前
提があるでしょう。できることならば、ミス
タッチとかミストーンが少ない方がいいわけ
です。ところがジャズの場合、そこは大目に
みられる。その場で作曲し、編曲し、演奏
するというのがアドリブを含めた完成度、構成
の方が重視される。もつと言え、そこを楽
しむのがジャズだから。クラシックは、チャイ
コフスキーならチャイコフスキーの作品をど
うとらえているのか、作曲家の解釈から入る
わけですね。極論すれば、ベートーヴェンの第
5番のジャジャジャの後に、フェル
マータが一つあるだけで、息が止まるほど
伸ばせ、とはかいてないわけですよ。すなわ
ち、その長さは、指揮者や演奏者の解釈で
決まるわけです」

【はねだ けんたろう】

ピアニスト・作曲家・編曲家。桐朋学園大学音楽学部ピアノ科4年の時、第39回「音楽コンクール」ピアノ部門第3位入賞。卒業後は、スタジオ・ミュージシャンとして数多くの歌謡曲やポップスのレコーディングに参加。一方、作曲家としてもTBS系「渡る世間は鬼ばかり」、TV朝日系「西部警察 PART Ⅱ」などの数々のTVドラマを手掛け、アニメ「超時空要塞マクロス」で日本アニメ大賞・音楽賞、映画「薔薇の標的」で日本アカデミー優秀音楽賞等数々の賞を受賞。30代半ばより、再びクラシックのピアノ演奏に傾注し、日本の全てのプロ・オーケストラと共演。また、モスクワ・フィルハーモニー交響楽団と共演のほか、近年は指揮者としても新境地を開拓。現在、TV朝日系「題名のない音楽会21」の司会を務める。東京音楽大学客員教授。

ピアノとは鏡みたいなもの、と氏。「そのときの体調や心境が出てしまう。誰かの演奏を聴いても、まるでその人の日記を見るように中身が見えてしまうことがあるよね」

クラシックは生涯の友。

——来春のグランシップでのコンサートは、千ツァルト生誕250年にちなんだものとかがついています。

「千ツァルトは、聴くのは好きですけど、弾くのは正直恐いね。ベートーヴェンは自分で弾いた方が面白いかもしれないけど、なぜかという、千ツァルトやバッハの音楽には、ムダなものが一切ないから。ただ、バッハというのは、合理的な頭脳を持ち主の作曲家なんだけど、千ツァルトはもっと人間っぽいんだよね。だから、千ツァルトほど意見が極端に分かれる作曲家はいないんじゃないかな。

ある人は最高にエロティックだし、ある人は天衣無縫で子どものまま、あつという間に人生を走り抜けた人だし。僕にはあまり悩みのなかった人のように思えるね。後から後から作品が湧いてきちゃってさ。その点、ベートーヴェンは苦悩の人でしょう。低いところで第3音が重複する、あれがベートーヴェンの特徴なんだけど、千ツァルトにそれは絶対ない。鈍いなあ、重いなあという音は、ちゃんと省いてある」

——今回は『フィガロの結婚』序曲と『ピアノ協奏曲23番』『交響曲25番』というラインナップですが。

「たとえば今回、シンフォニーの『25番』を選んだ理由は、千ツァルトには、短調の曲が極端に少なく、シンフォニーでいえば、41曲のうち、短調は有名な『40番』と『25番』だけで、『40番』はすでに人口に膾炙している。一方、『25番』は、演奏される回数は比較的

少ないんだけど、どなたも知っている曲だから、生の演奏でぜひ聞いて欲しいと。それから『23番』は、後期の代表的なコンチェルトで、めくるめく楽想が詰まった曲なんです。どうして彼はあれだけの楽想でたった1曲しか書かなかったんだろう。千ツァルトほどの才能があったら、あのフレーズで2〜3曲書けたんじゃないかと思うんだけど。そして、『フィガロの結婚』は、有名なオペラ喜劇ですね。人間なんだかんだ言っている、日頃の行いが大事だと、日頃の結婚、フィガロの結婚と。(笑)」

——最後に今後の抱負をお聞かせください。「ミュージカルを書きたい、オペラを書きたい」というような壮大な夢はないんですよ。出かけて行った先で、弾いて、振って、いろんなエピソードをお客さんに紹介して、クラシックの食わず嫌いを一人でも減らしたい、音楽は楽しんだと言いたい。これは亡くなった芥川也寸志さんの言葉の引用で申し訳ないけれども、ポピュラー音楽というのは、向こうから“やあやあ”と声をかけてくれる友人だと。その点、クラシック音楽というのは、こちらから手を出さないと握手してくれないシャイな奴だけだ、そのかわり一度友達になったら、生涯の友達になるよと。これはまさに上手い言い方だと思います。別にポップスが軽い奴だということじゃなくて、今日はポップス君と飲みたいなと思う時があれば、今日はクラシック君に悩みを聞いて欲しいなという時もある。その時その時で音楽というのは、最高の友人になるということを僕のスティージからわかっていただければと思います」



2006.2/26 日 要事前申込

静鉄グループPRESENTS

羽田健太郎の素晴らしき世界
～モーツァルト生誕250周年～

PM1:30開場 PM2:00開演

グランシップ 中ホール・大地

参加費1,000円(要事前申込)

申込方法/P24参照

曲目/歌劇「フィガロの結婚」序曲K.492

ピアノ協奏曲第23番イ長調K.488

交響曲第25番ト短調K.183 ほか

指揮・ピアノ・お話/羽田健太郎

演奏/静岡交響楽団